

平成28年1月20日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 長野県教育委員会

所 在 地 長野県長野市大字南長野字幅下 692-2

代 表 者 職 氏 名 教育長 伊 藤 学 司

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	ながのけんこもろこうとうがっこう	ふりがな	おおた かずあき
学校名	長野県小諸高等学校	校長名	大 田 一 昭
ふりがな	こもろしりつこもろひがしちゅうがっこう	ふりがな	たかみざわ まさひろ
学校名	小諸市立小諸東中学校	校長名	高見澤 正 裕
ふりがな	こもろしりつあしはらちゅうがっこう	ふりがな	くろさわ としのり
学校名	小諸市立芦原中学校	校長名	黒 沢 敏 範
ふりがな	こもろしりつひがししょうがっこう	ふりがな	とくたけ たかお
学校名	小諸市立東小学校	校長名	徳 武 隆 夫
ふりがな	こもろしりつさかのうえしょうがっこう	ふりがな	くぼた よしふみ
学校名	小諸市立坂の上小学校	校長名	久保田 好 文
ふりがな	こもろしりつのぎししょうがっこう	ふりがな	うつのみや みちたか
学校名	小諸市立野岸小学校	校長名	宇都宮 通 孝
ふりがな	こもろしりつすいめいしょうがっこう	ふりがな	こばやし あきひろ
学校名	小諸市立水明小学校	校長名	小 林 昭 寛
ふりがな	こもろしりつちくましょうがっこう	ふりがな	はながた たみこ
学校名	小諸市立千曲小学校	校長名	花 形 多美子
ふりがな	こもろしりつみなみがおかしょうがっこう	ふりがな	はらだ ちかず
学校名	小諸市立美南ガ丘小学校	校長名	原 田 千 万

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

児童生徒の英語によるコミュニケーション能力を育成するため、小・中・高の連携を重視したカリキュラムの作成、各学年の到達目標の明確化と評価の在り方、指導内容や教材開発、HRTとALT、英語で英語の授業を進める指導方法、家庭学習に関する研究開発を行う。

(2) 研究の概要

小・中・高を通じて、子供たちが豊かに英語に触れる機会を大切にしたい指導を行い、英語教育の充実を図りたいと願う。また、英語を使って自らの考えや気持ちを伝え合おうとする子供たちの育成を目指していきたい。そのために、以下の点について研究を行う。

1 小・中・高の指導方法・指導内容の改善

- (1) 英語で授業を行う工夫（教員による英語の使い方、T・T、児童生徒の言語活動の工夫など）
- (2) “Hi, friends!”や独自の教材を含む効果的な指導内容及び教材の開発、改良（小学校）
- (3) 小学校における文字指導の在り方と中・高における「読むこと」「書くこと」の指導への接続の在り方。中・高では市販の多読教材を薦めるだけでなく、英語教員とALTが教科書教材に関連付けて執筆し生徒のレベルに合ったreading教材を開発する。
- (4) 家庭学習の在り方
- (5) 教員研修の在り方（学級担任及び英語担当教員の指導力、英語力向上）

2 小・中・高の連携の在り方

- (1) 児童生徒の実態と学校種間のつながりを踏まえた学習到達目標の明確化
- (2) 小・中・高の情報交換、交流、カリキュラム作成

3 評価の在り方

- ・各学年の学習到達目標実現のためのカリキュラム作成とそれに基づく評価の在り方の研究

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

① 現状の分析と研究の目的

ア) 子供や学校等の現状や課題の分析

《小学校の現状》

- (1) 児童が理解できるインプットを多量に提供することがコミュニケーション能力の育成にとって鍵であること、T・T改善の必要性について共通理解を図っている。
- (2) 早期英語教育を目指し、1学年から徐々に英語に触れる機会を増やし、各学年の英語関係の授業時数を下記の通り定めている。

1~2 学年	年間 10 時間	3~4 学年	年間 20 時間	5~6 学年	年間 35 時間
--------	----------	--------	----------	--------	----------

- (3) 平成 26 年度から ALT を小諸市単独で採用。小学校における全ての学年の全ての授業を ALT と HRT との T・T によって行っている。ALT の研修を教育委員会指導主事が毎月一度 2 時間程度実施している。
- (4) “Hi, friends!”を参考に小諸市独自のカリキュラムを作成し、26 年度から使用している。
- (5) 各学年の具体的な学習到達目標を明確にしている。（次ページを参照）

※小諸市では、教科化を考慮し、現在、各学年の学習到達目標を次のように定め、研究している。

各学年の目標（1・2年は省略）（CAN-DO リスト参照）

Grade 3:

- ① 例えば、(Do you like...? How old are you?)などそれまでに習い覚えた簡単な英語を使って、友達と話し、友達について2～3のことを知ることができる。
- ② 簡単なチャンツを発表することができる。

Grade 4:

- ① 友達と一緒にグループでチャンツが発表できる。
- ② アルファベット文字（大文字及び小文字）を判別し、コピーすることができる。
- ③ What color do you like? What sports do you like? What is this? など、What を使って質問することができる。

Grade 5:

- ① (How many...? How much...? How old...?)などの表現を使って友達と聞き合うことができる。
- ② アルファベット文字を読んだり、書いたりする学習を続ける。
- ③ 限られた基本的な単語を見て、読むことができる。
- ④ This is.... He / She likes.. He/ She is...years old. など、それまでに習い覚えた表現を使って、家族や友達を紹介することができる。

Grade 6:

- ① My birthday is... I'm...years old. I want to... I can... I study... など、これまでに習い覚えた表現を使って自己紹介ができる。
- ② これまでに習い覚えた幾つかの単語を見て書く（コピーする）ことができる。
- ③ これまでに習い覚えた数個の基本的な文を見てコピーすることができる。（My name is ..., I am from Tokyo. など）
- ④ 英語で、簡単な物語をグループで発表できる。

(6) 小・中各校の教員1名とALT、教育委員会主導で「小諸市英語教育推進委員会」を組織し、2か月に一度の割合で研究会を実施している。

(7) 毎年、小学校6校の内半数の3校が、公開授業を実施、小諸市英語教育の向上を図っている。中学校の教員も参加している。（来年度から高校の教員も参加予定）

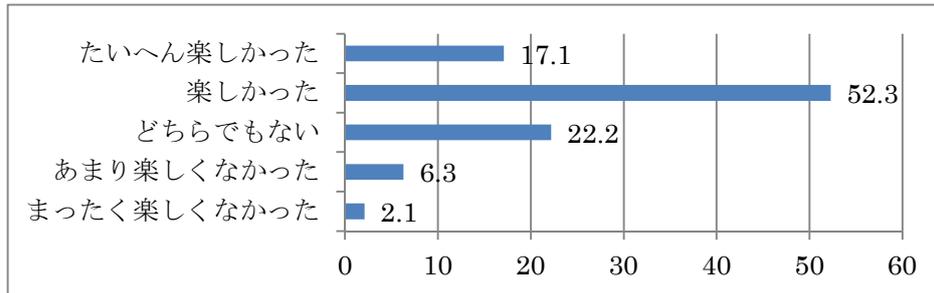
(8) 26年度は、全ての小学校で、指導主事とALTを指導者として英語研修を実施した。

(9) 平成26年4月に中学1年生全員を対象に、英語の授業についての意識調査を実施した。

【調査結果の一部】

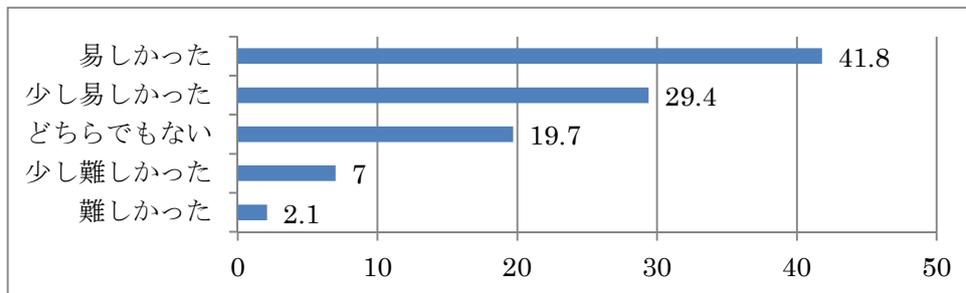
○小学校の英語活動に関する意識調査結果と簡単なコメント（コメントは朱で表現）

No. 1 英語の授業は楽しかったですか？



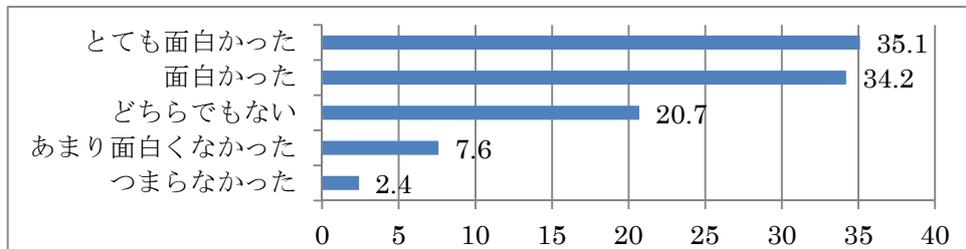
「あまり楽しくなかった」を含めると授業に馴染まなかった生徒は8.4%（1クラス2～3名）

No. 2 ALTの先生の英語は易しかったですか、難しかったですか？



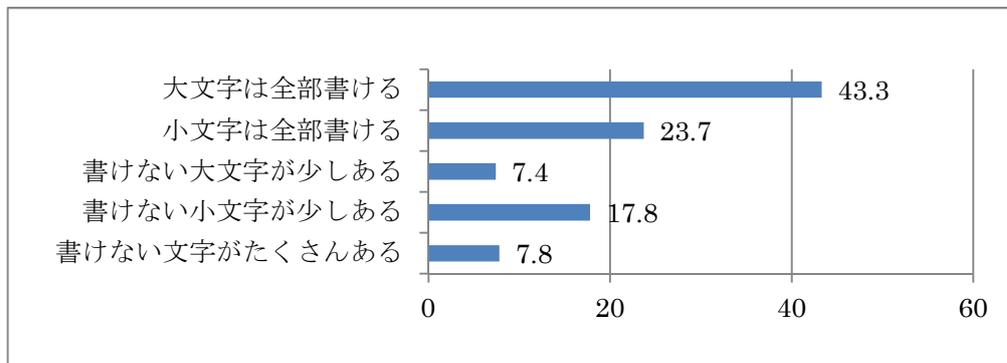
「少し難しかった」を含めると、難しいと感じていた生徒は9.1%（1クラス3名程度）

No. 3 日本語と英語の違いやいろいろな国の文化の違いを面白いと感じましたか？



言語や文化について興味を示さなかった生徒は、10%（1クラス3名程度）。

No. 4 アルファベットの文字を書くことができますか？



書けない文字がたくさんあると回答した生徒が8%（1クラス2～3名程度。英語が楽しくない、と感じている生徒の数とほぼ一致）

《小学校の課題》 現状分析の結果、本事業で取り組むべき課題は下記の通りである。

<課題1> カリキュラムの再考

- ◆本事業の取組に当たり、3、4学年（外国語活動としての授業）と5、6学年（教科としての英語教育）共に、教育のねらいや授業時数が異なるため、カリキュラムの見直しを行う。また、それぞれの学習到達目標についても現実的、具体的に再考する必要がある。

<課題2> テキスト（教材）

- ◆5～6学年については、教科という視点から教科書にふさわしい教材を選択したい。KIDS CROWN（三省堂）を想定している。また、3、4学年については、外国語活動という視点から“Hi, friends!”を主たる教材として採用したい。
- ◆文字の扱いについての指導は、例えば文部科学省発行のものを使用し、指導法の改善も視野に入れて取り組みたい。

<課題3> 授業の進め方（指導法）の原則

- ◆これまでは、listening with comprehension を基本に据え、production は比較的控えめに指導を続けてきた。その結果、児童が活発に英語を発するところまでは到達できなかった。積極的に、言いたいことが英語で表現できる児童の育成について研究を深めたい。

ただ、これまで進めてきた「望ましい外国語教育の principles」（下記）は守りながら英語教育の改善を図りたい。

《Listen with comprehension ⇒ think ⇒ judge ⇒ decide ⇒ express》

- ◆Reading と Writing の系統的な指導

これまでは、4年生からアルファベットの文字学習、5年生で単語の模写、6年生で限られた数の英文模写を指導してきた。しかし、本事業では、家庭学習（宿題の在り方）などを含め、Reading と Writing について研究を一層深めたい。

<課題4> 教員研修の在り方

- ◆ALT と組んで T・T を行う日本人指導者の英語使用力を向上させたい。26年度は、各小学校とも一度研修会を行ったが、今後、研修の質についても研究を深めたい。

<課題5> 児童の視点に立った課題

- ◆児童の意識調査によると、英語は難しいと感じている児童と、英語は楽しくない、という児童とはほぼ一致していた。児童に難しいと思わせる指導者の英語の使い方は改善しなければならない。小諸市の指導主事と信州大学など長野県の指導者で開発した英語の使用法（MERRIER Approach）を活用し、指導法の改善を図りたい。
- ◆中学校入学時点で「書けないアルファベット文字」がたくさんある、と回答した生徒が8%もあり、逆に「全部書ける」と回答した生徒は大文字が43%、小文字は23%に過ぎない。本事業では、文字指導の在り方も課題の一つにしたい。

《中学校の現状》

(1) 新1年生の実態

- ① 従来の1年生に比べて、listening の学力が高い（ALT や JTE の英語を聞いて、およその意味が推測できる。また、聞いて認識できる単語が多い）。
- ② Greeting 程度の英語を発話することができるが、他の英語表現はあまり覚えていない。
- ③ アルファベットについては、生徒によって習得の程度に差がある。ただ、英語を読んだり、書いたりしてみたいと願っている生徒が多い。

(2) 中学校の対応

- ① ALT と JTE は共に、授業で英語を多用することを原則としている。
- ② 単に listening ability を向上させるだけでなく、listening 活動を通して結果的に発話力が向上するような指導方法を模索している。
- ③ listening, speaking, reading, writing の4技能のバランスを重視している。
- ④ 文法の基礎から丁寧に指導している。
- ⑤ 文法の正確さにこだわらず、自分の気持ちや考えを自由に表現するよう指導しているが、次第に発話の数が減っていく傾向が見られる。
- ⑥ 現在学習しているテキストの復唱はできても、既習の言語材料を使って自己表現をすることは難しい。
- ⑦ Speaking の力を伸ばすため、期末試験に Speaking test を加えている。また、文字に親しむよう「読書カード」と「自己紹介カード」を一部活用している。

《中学校の課題》

<課題1> 小学校との接続の在り方

- ◆4月当初、新入生を対象に学力テストを実施。その結果の分析に基づいた、特に4月、5月の指導法の研究が必要である。

<課題2> 指導者の力量向上

- ◆生徒にとって分かりやすい英語を使えるようにすることに課題がある。

<課題3> ALT と JTE の効果的な T・T の開発

- ◆文法の説明やテキストの日本語訳などに多量の時間を割いている JTE が多い。日本語訳なしでもテキストの理解が可能になるような指導法に転換することが必要。T・T の在り方や ALT の活用法の工夫に課題がある。

<課題4> テキストの教材化の工夫

- ◆テキストの背景（状況・文脈）を補ったり、MERRIER Approach を使って言い換えたり書き換えたりしながら提示する教材化が求められている。書き換えられた新しいテキストを見ると、original text の意味が一層よく分かり、日本語訳の必要がなくなるような教材化を課題にしたい。original text や rewritten text に cloze approach テストなどを援用により、考えて文や文章を創造する力の育成も研究したい。

<課題5> 生徒が自然に（抵抗なく）発話できるように導く工夫

- ◆生徒の発話力を高めるために、accuracy よりも、exchange of meanings を主たるねらいとする活動を増やすためにどうすべきか。

<課題6> 教科書を越えた活動の工夫と活用頻度

- ◆①教科書以外の教材を選択しての reading ②指導者による読み聞かせ ③1分間 speech ④教科書で扱ったテーマ (topics) についての感想を書く ⑤pair work や group work で debate の基礎になる活動 等を仕組み、英語をコミュニケーションの手段として活用する機会を数多くしたい。限られた時間の中で、このような活動を系統的に位置付けることができるのかが課題である。モジュールの体系的な活用も課題の一つである。

《高等学校の現状》

(1)新1年生の実態

- ① 小諸市立中学校卒業生がおよそ40%を占めている。4月当初、中高連絡会を開催し、入学生に関しての詳細な情報交換をしている。
- ② 新入生の実態
 - (a)入学生の多くは、中学校時代に英語嫌いになっている。
 - (b)中1レベルの語彙も不足しがちで、書けない生徒が多い。
 - (c)小学校時代に培ったゲーム形式やクイズ形式の学習法には興味を示し、ペアワークにも積極的に参加している。ペアワークでは、比較的大きな声で発話する素地が備わっている。

(2)高等学校の対応

- ① 新入生の実態を把握するため、4月入学当初英語学力診断テストを実施。26年度は、ベネッセのスタディ・サポートを利用した。来年度は本校独自のテストを実施する予定である。
- ② 英語学習に再び関心を高めるため音声面の指導を強化し、下記の指導に力を入れている。
 - (a) ALTの活用を充実（2週間に1度はALT主導の授業を行い、ALTが基本単語を主とする listening materials を作成したり、母国の文化を英語で紹介したりして、事後簡単な T-F test や Q-A を実施。）
 - (b) ALT 主導で昼休みに、英語で会話をしながら昼食を共にしたり、希望者には放課後 ALT と英語で映画を鑑賞したりするなどの活動を導入している。
- ③ 帯学習として、listening 教材を用いて listening quiz や shadow reading を実施。
- ④ 指導者は、listening input の重要性を共通理解し、授業中は listening の時間を増やし speaking activities も多用するよう努めている。また、定期考査には、speaking test を実施し、20% 得点として、評価に組み入れている。
- ⑤ 長期休暇を活用して教科書以外の物語を読むよう多読指導にも挑戦している。

(3)高等学校の課題

<課題1> 指導者の既習の言語材料を使って話す機会の増加

- ◆生徒は、小、中9年間の英語学習経験から、易しい英語で語りかけると集中して聞こうとする。しかし、教員はこの事実を理解しながら、これまで日本語で説明する部分が多かった。本事業を機会に、指導者自身が英語で語り、テキストを書き換えたりするなどの実践を研究する。

<課題2>授業中の listening と speaking 活動を増やすことによる定着

- ◆どのような活動が listening や speaking 活動として効果的かを研究し、定着させることに課題がある。

<課題3> 英語の授業外の多様な活動を導入

- ◆ 校内で recitation contest や speech などのイベントを開催したり、生徒が英語検定などを受験したりする雰囲気作りが必要である。特に、今後予定されている大学入試制度改革の中身を考慮し、英語検定への関心を高めたい。

イ) 研究の目的 上記「I. 現状の分析」を踏まえ、下記を本事業の「研究の目的」とする。

「本事業の推進に当たっては、小・中・高の連携を密にし、本研究の目的を共有して実効性高い事業として推進したい。指導者が児童生徒にとって分かりやすい英語を使用することを通して、英語によるコミュニケーション能力の素地を築き、4技能をバランスよく習得し、グローバル時代に生きる人間として英語を使いこなすことのできる児童生徒の育成を本研究の目的とする。」

②研究仮説

ウ) 課題解決の手段等

小・中・高校ともに、**listening with comprehension** が **production** への土台であるという認識(**listen** ⇒ **think** ⇒ **judge** ⇒ **decide** ⇒ **express**) に立って研究を進めることから、ALT も含め、教員が生徒に分かりやすい英語を使って指導する力を向上させることを前提として、下記の通り研究と実践に取り組み、下記 **エ)** に述べる成果を得ることができるものとする。

1. 小学校では、

- ①高学年の教科化を含め、卒業までの授業時数が相当に増えることから、**listening** と **speaking** だけでなく **reading** と **writing** の指導過程と到達目標を改めて検討する。
- ②**listening** の学力を高めつつ、個々の児童が次第に自分の気持ちや考え、事実などを他者に伝える力を育む指導過程と指導法を、これまでの経験を活かして開発する。
- ③全ての児童が、英語学習に一層の興味を示し、英語によるコミュニケーション能力を実質的に向上させるために **T・T** などを通して、コミュニケーションの効果的なモデルを示す工夫に取り組む。また、個々の児童の「学び」に対しこれまで以上に詳細に観察し、有効な評価法の在り方とその活用法を研究し、英語教育の向上につなげたい。
- ④発音と文字の関係(**phonics**) の効果的な指導法を探り、**reading** や **writing** に親しませ、宿題の大切な中身の一つと位置付け、自立学習の在り方へと発展させる。

2. 中学校では、

- ①入学時に学力テストや意識調査を実施し、その結果を英語教育の指導改善に活かす。
- ②指導者が、音声と文字による様々な教材作成(教科書テキストの **rewriting**、関連教材の作成、**questions-making**、**T-F test** 用 **statements** の作成、**cloze approach test** の作成、など)に日常的に取り組む。
- ③②を実践するに当たって、ALT との **T・T** の新たな在り方を究明する。
- ④小学校での学びを踏まえ、生徒が小学校で培った発話への積極性を更に伸ばすため、**pair-work** を多用したり、多様な活動を体系的に実施する帯学習の実践、**short speech**、**dramatization** など新たな活動を導入したりするなどして、内容の高度化を目指す。
- ⑤「読書カード」と「自己紹介カード」の導入により、**reading** の量を増やしたり、自己紹介や **My dream** などをテーマに **writing** の経験を豊かにしたりする。

3. 高等学校では、

- ①4月当初、新入生対象の英語学力テストを実施し、その後の教育に活かす。
- ②英語学習に興味を失っている生徒達が再び英語学習に興味を持つための指導法の工夫をする。

- ③教員が生徒に分かりやすい英語を話したり、生徒の書く力を向上させたりする。テキストの introduction, retelling、extended material など多様な教材を開発し、listening, reading, writing 指導に役立てる。
- ④生徒には、listening and reading input を増やすだけでなく、1 分間 speech、recitation などの機会を日常の授業の中でたくさん与えるよう工夫する。Speaking ability の評価について現在 1 年生では期末テストの中で工夫しているが、他学年でも授業中に組織的・継続的に speaking の評価を行うなど、評価方法を検討する。

エ) 期待される具体的な成果

1. 小学校

- ①授業時間が増え、研修の機会も増えることから、ALT を含めた指導者（教員）の教授技術が格段に向上することが期待できる。
- ②3・4年生は、授業時数が相当に増えることから、communicative ability の基礎である listening input の量が格段に増え、英語を口にするチャンスも増える。文字学習も充実する。宿題も定期的に出され、その質も向上する。家庭学習が日課になり、自立学習の習慣が身に付くことも期待できる。
- ③5・6年生については、特に2年目からは、授業時間が2倍に増えるため、listening input の量が増えるだけでなく、speaking の経験が増え、対話能力も向上する。また、時間的にゆとりが生まれるため、授業中の個人指導が徹底できる。その結果、積極的に、自信をもって英語を話す児童が増えることが期待できる。英語嫌いになりそうな児童を早期発見し、軌道修正できる可能性も高い。文字学習を本格化し、reading、writing の活動も多様化する。自立学習が習慣化し中学校への接続も以前よりスムーズになると期待できる。

2. 中学校

①指導者の資質向上と生徒への効果

JTE, ALT 共に生徒に分かる英語の使用能力が向上するため、生徒の英語理解力が向上し、コミュニケーション能力が高まるだけでなく、英語に対する親しみが増し、結果的に英語嫌いが従来よりも少なくなることが期待できる。

②生徒が中学校英語へスムーズに移行できる

従来、中学校に入学すると、文字を伴う英語学習に抵抗を示す生徒が多かった。しかし、小学校で、ある程度文字学習になじんでくるので、中学校の英語に抵抗を示す生徒が減ることが期待できる。

③指導者によるテキストの rewriting、多数の T-F 用 statements、など、多様で多量の reading 教材に触れることになるので、spoken English に加え、written English についても、一段と学力が高まることが期待できる。「多読カード」「自己紹介カード」の効果も明確になる。

④教科本文の暗唱程度に留まらず、自ら考え自ら発話する力が向上し、日常的な会話能力や、他者と意見を交換し合う力が身に付き、debate などの基礎力も身に付くことが期待できる。

⑤speech contest、英語検定などに積極的に参加する生徒が増える。

3. 高等学校

①教員が小・中の英語教育に触れる機会が増えることで、高校における指導を効率的に進めることができる。

②communication 重視の英語教育に転換できる。

③accuracy 重視の教育から、fluency 重視へと変わり、その結果、生徒にとって、英語を発することへの抵抗が次第に少なくなっていくと期待できる。

④生徒の英語学習に対する興味の高まりとともに学力の向上も期待できる。

③研究成果の評価方法

《小学校》

(a) ALT を含む指導者の評価

小諸市では、小・中学校における英語指導者（指導主事）として英語教育の専門家（信州大学名誉教授・英語教育学専攻）を雇用し、連日小・中学校を計画的に訪問し英語の授業を参観させている。参観の直後、口頭でアドバイスした上で、詳しく評価し、指導・アドバイスを文書化し、校長を通して HRT と ALT に渡している。指導者それぞれは、次回、指導主事に授業参観を受けるまでに、指摘された点を改善するよう努めている。

(b)小・中・高の全ての ALT と指導主事による ALT meeting を毎月一回第3週の水曜日の午後定期的に開いている。指導主事が撮影し、編集した T・T の授業を映写し、出席者による批評会を行っている。

(c)小・中・高の全ての学校から代表者 1 名、全ての学校の ALT、及び指導主事を含む教育委員会の関係者で構成された「小諸市英語教育推進委員会」を2か月に1度の割合で開催し、各校の英語教育事情や悩み、改善点などを出し合い、互いに学び合いの貴重な機会としている。

(d) 子供たちの学習に関わる評価方法について

(d.1) 全ての授業の終わりの 5 分程度を<Reflection: 振り返り>に当てている。

子供たちが自らの学習を振り返り、また、友達や指導者の活動にも敏感な「気付き」の心を養い、感じたことを的確に言葉や表情・ジェスチャーで表現する学習の場になっている。

(d.2) 子供たちの「振り返り」を文字で表すことも重視している。

発言しない子供への配慮や、発言した子供のコメントを後日深く検討するねらいから、時々「振り返りカード」に記載。できるだけ、学年ごとに統一した形式を使うよう勧めている。何のために、また、どのような形式にするかなど常に改善を重ねているが、26 年度は、指導主事が「振り返りカード」の具体的な在り方について一つのアイデアを提案している。

全ての子供の成長ぶりが継続的に記録に残り、しかも、記録は子供達自身の振り返りを参考に記載し、記載方法は指導者の過重な負担とならないよう、できるだけ簡略を旨としている。

(d.3) 意識調査と学力テストについて

現状の分析と研究の目的 **1.小学校** の欄で紹介した**意識調査**は、毎年一定の時期に実施し、個々の子供たちの実態を的確に把握し、授業の改善に役立てている。調査内容を更に精査し、研究成果に役立てたい。

子供たちの英語学力については、今年度初めてパイロットとして“**Hi, friends!**” 1 を対象に独自に問題を作成し、中学校の新入生（4月）対象に中学校で実施した。このような試みは小学校英語教育の評価として大変有効であると判断し、今後は6年生卒業時に実

施し、データを中学校に送ることが望ましいと考えている。

【例】

《問題》 久美の一日の生活について話します。正しいものに○を付けましょう。

This is my life. I go to school at 7:50. I eat lunch at 12:30. I go home about 4 o'clock. I take a bath at 8 o'clock. I go to bed at 9:30.

	7:30	7:40	7:50	8:00	分からない
---	------	------	------	------	-------

	3:00	4:00	3:30	4:30	分からない
---	------	------	------	------	-------

	7:30	7:40	7:50	8:00	分からない
---	------	------	------	------	-------

(d. 4) 宿題の工夫と、個々の生徒の学習評価

宿題は、学習態度・意欲、学力など多くの視点から個々の生徒の学習評価を可能としている。(指導者、子供の双方の過重負担にならないよう配慮している。)

【例】

(課題1) 続いているアルファベット文字を考えて□の中に入れてみよう。

(課題2) あみだくじです。①をたどっていくと、どんな文字に出会うでしょう。

Name _____

1. A, B, □

2. H, I, □

3. M, □, O

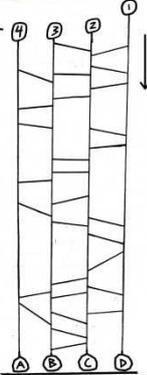
4. Q, □, S

5. T, □, V

6. W, X, □

7. K, L, □

Answers 1. □ 2. □ 3. □ 4. □



《中学校》

(a) (b) (c) 小学校と共通

(d) 本事業をきっかけに、個々の指導者(教員)が、「個人追究テーマ」を設定し、毎学期末にその成果を教科内で発表し合うことになった。

(e) 学期末に、全ての生徒を対象に **speaking test** を実施。生徒には、事前にテストの対象となる音読用教材を事前に渡し、音読の練習をさせ、テストでは、その教材に関する質問と、個々の生徒にふさわしい個人的な質問をし、表現力の重要な評価法としている。

(f) **reading**、**writing** の評価については、テキストの書き換え、ALT の毎時間の **talk** を文字化したものなど、意識して文字学習の量を増やす計画であり、授業中頻繁に生徒の学力をチェックすることができる。また、年度の中頃(夏季休暇)から教科書以外の読み物教材を渡し、できるだけ多く読むよう勧め、個人の読書カードによって、個々の生徒の学習状況の評価する。また **writing** については「自己紹介カード」を作成し、学習が進むにつれて、紹介の中身を次第に豊かに書き換えさせることを通して、学力を評価する予定である。

(g) 英語検定については、従来第2回までで、3級及び準2級の合格者が両校合わせて80名(全校の生徒の25%程度)だったが、来年度はもっと増えるようにしたい。また、年に一度 **speech contest** を実施。参加希望者が多い場合には作文の事前審査をしている。来年度は、参加者を増やしたい。

《高等学校》

(a) (b) (c) 小・中学校と共通

(d) 単語の帯学習の成果を評価するために、毎学期末の試験では、単語の問題を意図的に多量に出題して日常的な学習習慣の評価にし、毎学期末に **listening** 問題を出題し重点を置いた **listening** の指導効果を評価。

(e) 1年生の3学期には全生徒を対象に **speaking test** を実施する。従来成績と比較し、**quick response** ができるか、既習の言語材料を使い、文法を気にせず発話できるか、など今回の事業による成果について評価したい。

(4) 研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

小諸市	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	平成26年度	第一年次(H27)	第二年次(H28)	第三年次(H29)
①小学校 外国語活動型	/	第3学年 1コマ	第3学年 1コマ	第3学年 1コマ
②小学校 教科型	/	第5学年 1コマ	第5学年 2コマ	第5学年 2コマ

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第四年次、校種別

第1年次 【研究開発課題に基づくカリキュラム開発準備及び指導・研究体制の確立】

(1) 小学校【外国語活動型の授業実践及び文字指導に関する試行開始】

① 新カリキュラム体制について

1、2学年については従来通り、それぞれ年間10時間に据置き、3、4学年においては、本事業により、週1時間（年間35時間）実施し、外国語活動として位置付ける。5、6学年については、27年度は週1時間（年間35時間）とするが、教科としてしっかり位置付ける。

② 研究体制及び指導体制について

(a) 研究体制について…26年度に開発したカリキュラムを修正し、全ての学校の全ての学年が、改訂「小諸カリキュラム」に従って研究を推進する。

(b) 指導体制について…27年度は、従前の組織・指導体制に加えて、多数の外部の指導者による運営指導委員会による指導をいただき、指導体制を一層強化して事業に取り組む。

③ 教材について

3、4学年には外国語活動の教材として、それぞれ“Hi, friends!”1,2を主たる教材とし、5、6学年には、それぞれ *KIDS CROWN* (三省堂) (standard版) 及び同 (advanced版) を使用する予定である。平成27年度は、*KIDS CROWN* (standard版) の一部のみを使用。28年度から必要な部分を選択し、Hi, friends! と相補的に使用する予定。“Hi, friends!”、*KIDS CROWN* 共に小諸市で開発したカリキュラムと極めて近似した編集となっており、教育効果が期待できる。

また、文字学習については“Hi, friends (2)”の一部を活用。ただし、文字学習を含め、学校独自で創作した教材を広く活用している。（映像による教材を含む）特に異文化理解には、独自教材が効果的であった。

④ 研究の評価について

研究の評価については、従前の体制に加え、運営指導委員会の指導を得て、綿密に、そして客観的に資料を積み重ねつつ、その都度その都度見直していきたい。

(2) 中学校【言語活動、家庭学習の各校の課題把握と学習到達目標作成】

① 研究体制について

- (a) 4月当初、本事業の意義とねらい、改善すべき指導法について学校ごとに確認する。
- (b) 新入生の実態を正確に認識するため、小学校との連携を取るとともに、新入生全員を対象に学力検査を実施し、綿密な評価を行い、個々の生徒について正確な学力を把握する。
- (c) 授業では、常に英語によるコミュニケーションを展開するよう努め、教員が互いに授業を見合う機会を増やすと同時に、指導に当たってのアイデアや作成した教材は、共有することとする。

② 指導体制について

小学校に準ずる。

③ 目標達成の実現について

- (a) 学年ごとの目標を CAN-DO リストで明確にする。
- (b) 目標達成のため、文法偏重から、伝達重視へと教員の意識・発想を大きく変える。
- (c) 多読用の教材は常に整えて、reading 指導を徹底するとともに、「自己紹介カード」を活用して creative writing を重視した授業を進める。
- (d) 二つの中学校が、市内の全ての学校に対して、毎年交互に授業を公開する。小・中・高等学校間の英語教育の連携を図る。

④ 研究の評価について

小学校に準ずる。

(3) 高等学校

① 研究体制について

- (a) 中学校に準ずる。
- (b) 新入生の実態を正確に認識するため、4月当初高等学校独自に学力テストを行い、個々の生徒について正確な学力を把握する。
- (c) 中学校に準ずる。

② 指導体制について

大学・長野県教育委員会指導主事など多数の外部の指導者による運営指導委員会の指導を得て教育に当たると同時に、小・中の教員や ALT とともに英語教育推進委員会に参加し、小・中の英語教育を背景に、本事業に取り組む。

③ 目標達成の実現について

- (a) pair work や group work 等を日常的に援用しつつ、英語を頻繁に使う授業を実践し、コミュニケーション重視の指導法に徹する。毎学期末に行う speaking test を大きな目標に授業を進める。
- (b) 多読用の教材を常に準備し「読書カード」を活用して reading への関心を高める。

④ 研究の評価について

小・中学校に準ずる。

第2年次【学習到達目標の作成及びグループによる協同学習を中核に据えた指導法の研究】

(1) 小学校【外国語活動型の授業実践及び文字指導に関する試行開始】

① 新カリキュラム体制について

3、4学年においては、初年度に準じて研究を進める。5、6学年については、週2時間（年間70時間）とし、本格的に教科(英語)として位置付ける。特に、1時間増となったことから、小諸市のカリキュラムの内容を再点検し、70時間にふさわしい目標に沿うよう大々的に修正する。

② 研究体制及び指導体制について

- (a) 研究体制について--- 初年度に準ずる。
- (b) 指導体制について ---初年度に準ずる。

③ 教材について

3、4学年で主たる教材として採用した“Hi, friends!” 1、2の活用法を、小諸市のカリキュラムと対応させながら点検を行う。5、6学年についても、KIDS CROWN (三省堂) (standard 版) 及び同 (advanced 版)の扱いを更に検討する。これまで継続してきた宿題の内容と活用法について、自立学習と関係させながら検討を加える。

④ 研究の評価について

前年度に準じて継続実践する。

(2) 中学校【言語活動、家庭学習の各校の課題把握と学習到達目標作成】

① 研究体制について

- (a) 前年度に準じて実践する。
- (b) 生徒の発話促進のアイデアを教科として共同開発する。

② 指導体制について

前年度の体制を継続、深化させる。

③ 目標達成の実現について

- (a) CAN-DO リストの形の学習到達目標を再点検を実施し、目標の改善を明確化する。
- (b) 毎学期末、speaking test を継続するが、日常の授業との連携を深めたい。
- (c) 「読書カード」と「自己紹介カード」の活用を継続し、生徒に刺激を与えたい。
- (d) 中学校も毎年交互に授業公開し、他校種との連携を深め目標達成のため努力する。

④ 研究の評価について

前年の体制を継続させる。

(3) 高等学校

① 研究体制について

前年度に準ずる。

② 指導体制について

概要前年度に準ずるが、小諸市英語教育推進委員会やALT meeting に加わり、小・中の英語教育について理解深め、教科内の研究・指導体制を一層強化したい。

③ 目標達成の実現について

(a)授業は英語で進めることを日常化し、文法偏重意識から脱することが真に英語教育の目標であることを徹底する。毎学期末に行う speaking test の質を高めていく。

(b)「読書カード」の活用法を再検討し、文字学習への関心・意欲を高めたい。

④ 研究の評価について

前年に準ずるが、評価は次第に日常化していきたい。

第3年次 【小中高一貫した学習到達目標に基づく評価の開発及び家庭学習に関する研究】

(1) 小学校【外国語活動型の授業実践及び文字指導に関する試行開始】

① 新カリキュラム体制について

カリキュラムに沿って、完成年度として本事業の目標達成に努力する。

② 研究体制及び指導体制について

(a) 研究体制について--- 前年度に準ずる。

(b) 指導体制について ---前年度に準ずる。

③ 教材について

(a) 3年間の完成年度という視点、小学校外国語活動、並びに教科という観点から望ましい教材の在り方を整理、まとめを行う。

(b) 宿題の在り方については、他教科との連携も視野に入れた内容を考える。

④ 研究の評価について

前年度に準じて継続実践する。3年間にわたる本事業の評価を行う。

(2) 中学校【言語活動、家庭学習の各校の課題把握と学習到達目標作成】

① 研究体制について

総じて前年度に準ずるが、常に改善を念頭に置く。

② 指導体制について

前年度の体制を継続、深化させる。

③ 目標達成の実現について

(a) CAN-DO リストの形の学習到達目標の再確認を行う。

(b)毎学期末の speaking test を継続するが、生徒の学力を高めるため日常の授業でも英語によるコミュニケーション活動を一層多く取り入れたい。

(c)「読書カード」や「自己紹介ノート」の指導を発展させたい。

④ 研究の評価について

(a) 前年度の体制を継続させる。

(b) 読書カードの実践と reading /writing 力への影響についても評価研究の対象にする。

(3) 高等学校

① 研究体制について

前年度に準ずる。

② 指導体制について

前年度に準ずる。

③ 目標達成の実現について

本事業の最終年度として、音声指導と文字指導とのバランスという視点から、特に、バランスの取れた英語使用力の育成を目指す。

④ 研究の評価について

前年に準ずるが、本事業の最終年度として、総合的な視点に立った評価を実施する。

○平成27年度の進捗状況・課題

◀ 小学校 ▶

(1) カリキュラムについて

派遣会社などでの研修や、出身国の大学等での研修を受けた経験豊かな ALT が多かったことも手伝って、カリキュラムの素案は、ALTs meeting で作成し、推進委員会での検討を経て、最終的に各校の意見を聞きながら、「小諸市立小学校英語カリキュラム」が完成した。

授業は、本来 HRT が主導すべきであることと、またこれからの英語教育は、コミュニケーション力の育成が狙いであることから、HRT は、授業中常に ALT と二人で子供たちの前に並び立つことを原則とした。コミュニケーションの力は、一人の指導者によるよりも、二人の指導者が常に英語を使って指導することによって、一層効果的に育成できるからである。

HRT の英語使用力、ALT の英語指導力、Team-Teaching の在り方などを評価の主たる観点として、指導主事が連日各校の授業を参観し、その都度、口頭と文字によるコメントを授業者に送っている。また授業の様子は全てビデオ撮影し、毎月行われる ALTs meeting で、再生しながら批評し合うことを続けている。このことは、ALT の指導力アップだけでなく、TT のコラボレーション、activities の選択の妥当性まで広範囲に及び、大きな成果を生みつつある。

(2) 指導体制について - 指導者自身が授業をしっかり見つめ直すことが肝心

小諸市では、事前に ALT と HRT とが授業の目標、導入する英語表現や語彙、activities の選択などについてじっくり検討し、Teaching Plan を作成することを原則としている。

format については、各校で工夫して実施しているが、授業の後に、HRT と ALT の反省（感想や改善すべき点）などを記す欄を、Teaching Plan の一部に設けている形式のものもあり、効果をあげている。

① 参観後の指導主事のコメント

授業参観の直後に口頭でコメントする場合もあるが、多くはメールで、HRT と ALT に、それぞれ日本語と英語で校長先生を通して本人に渡していただくように努めている。

② 子供たち自身の「振り返り」

子供たち自身の「考える力」を大切に、各校ほぼ共通のカードを毎時間配布し、記入後は、フォルダに綴じて提出させている。

子供たちの記録から、子供たちの学びの様子だけでなく、HRT 自身の授業方法や内容を見直すことができ、HRT の自己評価としても役立っている。

③ HRT の指導力向上の工夫

(a) ALT と HRT は、授業中は、通常子供たちの前に並んで立ち、常にコミュニケーションが可能な態勢を取っている。英語の授業は、全て英語教室で行い、授業開始前に、黒板に本時の Plan を英語で (Warm-up、3~4種の活動、振り返り) などと板書することになっている。この Plan を見ながら、HRT と ALT は、例えば以下のように、英語で授業の概要を簡単に説明することになっている。

ALT : What are we going to do today?

HRT: Well, first of all, we'll sing a song.

ALT: What's the name of the song?

HRT: It's ABC song. Can you sing the song?

ALT: Sure. Can I sing a little?

HRT: Oh, please.

ALT: (After singing) What's the next activity?

Demo を含め 5~6 分程度使って本時の概要を伝える。

この Demo には狙いが 2 つある。1 つ目は、子供たちに授業予定を示し、予測と期待感を持たせること。2 つ目は、この活動を通じて、英語に自信のない HRT に communicative に英語を使う力を修得してもらうことである。そのため、事前に Teaching Plan を検討する際に、ALT との英語のやり取りまで想定し、練習しておくことが肝要である。英語の修得については「教室が道場」を、全ての学校の合言葉として徹底させている。

(b) 授業を進めるに当たって幾つかの約束事（英語教育の原則）を守ることにしている。その一部を紹介する。

- ・ (指導上の原則) listen ⇒ think ⇒ judge ⇒ decide ⇒ speak の順序を常に意識して教えること。
- ・ 英語の活動をさせる前に行うデモのステップをしっかりと守ること。

その順序とは、

- ① ALT と HRT によるデモ
- ② 先生と 1、2 人の子供によるデモ
- ③ 子供同士によるデモ
- ④ クラス全体の活動（こうすると、全ての生徒が英語の活動に自信を持って参加することができる）

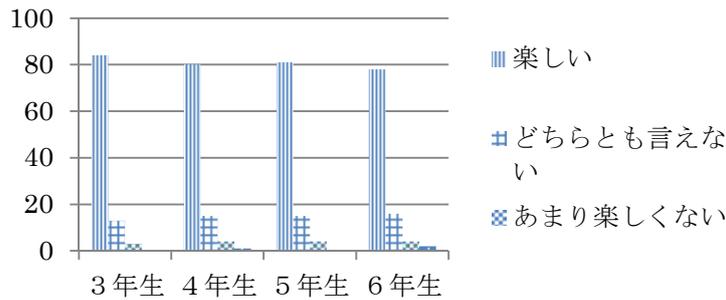
(c) ALT が一人で話すことは避け、HRT も率先して英語を話す。

(d) 文化や言語の気付きについては、できるだけ授業ごとに意図的に仕組み、子供たちに体験できる機会を提供している。カリキュラム冊子には、毎回の授業について、活動と文化の 2 つのコラムを設定している。

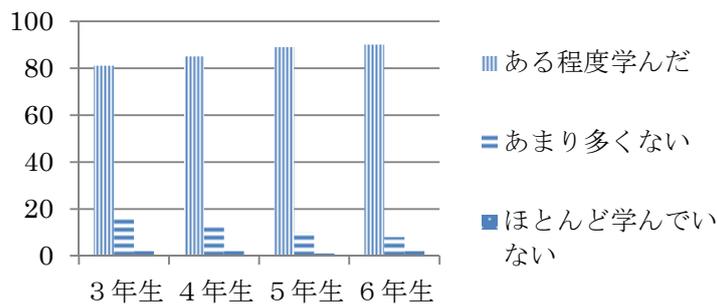
(3) 子供たちの意識調査とその結果について

12 月末に、英語の学びについて、子供たちの意識調査を行った。学習指導要領の目標に準じて①授業の楽しさ、②英語の理解度、③ことばや文化についての学び等について無記名で実施した。その結果は以下の通りである。目標に近づいているとはいえ、特に、ALT の話す英語の理解については、学年が進むごとに、難しいと感じている子供が増えている傾向が認められるなど、更なる努力が求められる。反面、英語の学習に対する興味は、3 年間を通して、一定の高い率を維持しており、ことばや文化についての学びも高学年になるに従って充実していることが見て取れる。

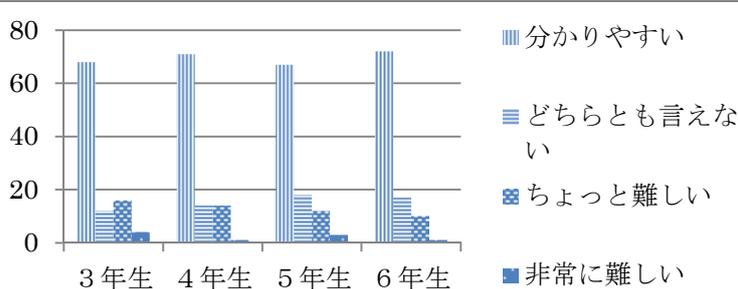
(質問1) 英語の授業は楽しいですか。(%)



(質問2) 日本語と英語の違いや文化について、たくさん学びましたか。



(質問3) ALTの英語は、分かりやすかったですか。



《 中学校 》

- (1) (主として) 英語による英語の授業 --- 特にどの場面、どのステージで英語を使うべきか。--- 従来、使用言語として、日本語を無意識、無目的に使っていた指導への反省に立って。また英語使用を補う立場から、日本語の使用をどう位置づけたらよいか。⇒ この点における小学校英語教育との接続・連携について、ALTを含め、小中学校英語指導者間の具体的な指導方法について検討。11月及び12月には、小・中・高等学校の教員・ALT、及び教育委員会関係者による授業参観を実施。口頭並びに文書によるコメントによる討論を行った。英語の使用については、小・中・高等学校を通して学習者に分かりやすい英語の使用力、特に、小諸市教育委員会指導主事(渡邊時夫)が開発し全国的に広く活用されている「MERRIER Approach」を授業中に使用することに一致している。
- (2) 小学校卒業時点における児童の意識調査結果、listening abilityの試験結果、文字学習の結果等の活用について--- 12月に行った「小学生の意識調査」結果、2月に予定されているlistening等の実技試験等を効果的に活用し、今後の指導(小中連携)に役立てる。
- (3) ALT活用の新たな取組と Team-Teachingの新たな発想の追究——(固定化した)

役割分担という発想でなく、常に **communicative teaching** を実施するための **Team-Teaching** という発想に立って進める授業方法を引き続き、追求する。

また、指導者が話したり、書いたりする内容については、新出の言語材料の導入や、既習の言語材料のリサイクル的な使用、教科書本文の概要を理解させる場面では、分かりやすい英語で言い換え、繰り返しなどに配慮し、書換え、TF、Cloze test や C-test などを多用するなど、英文をなるべく多量に **expose** するようにしている。

(4) 現在、芦原中学校及び小諸東中学校両校で実践中の「創作ノート・自己表現ノート作成」の研究を広く、深く、継続して進めたい---「授業とどのように関連付けるか」を重要課題の一つに決めている。

→ 具体的な実施方法 --- 1年生は1学期の終わり頃より実施。2年生はコミュニケーションノートとして、プリントを用意して実施。3年生は希望者に実施している。1・2年生では、大体月に1回のペースで実施。ALT との TT の感想や質問等を書かせ、文字を使ったコミュニケーションを図ることで、授業に生かすことができ、関連性も高まるという仮説を立てて研究に取り組んでいる。

(5) 英語検定受験への関心強化と受験者の増加---- 受験者の数が激増。更に多くの生徒に **challenge** させたいと願っている。

(6) CAN-DO リストの作成と目標実現への活動の裏付け

原案は作成したが、まだ完成までに至っていない。小・中・高等学校の望ましい連携を互いに模索している。

(7) 授業評価について---- 生徒にはできるだけ毎時間、一定の形式により、授業評価（困難点や成功感を味わえた点など、感想を含めて記述させたもの）を提出させている。3学期には、特に1年生については、従来との英語力の違いについて、実技試験を行い、統計処理を行ってみたい。

《 高等学校 》

(1) **speaking test** については、従来1年生に限って期末試験の一部としていたが、英語の使用力向上を大きな課題としていることから、他学年についても **speaking test** を期末試験等に次第に取り入れていきたいと願っている。

(2) 外部試験を学校としてまとめて受験させる方針を立てて、実践している。

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第四年次、校種別

第1年次 【研究開発課題に基づくカリキュラム開発準備及び指導・研究体制の確立】

(注) 運営指導委員会による評価の他、各学校自身による評価計画は下記の通りである。

1. 小学校

①全学年共通

(a) 毎時間の終わりに5分間 **reflection** (振り返り)を口頭で行う。

(b) 「振り返り用紙」を毎月1度配布。個々の生徒の実態を把握。

(c) **enter questions** を頻繁に行う。授業の初めに、教室の入り口で、JTE と ALT の二人がそ

れぞれ半分の生徒を対象に一人一人英語で対話する。教員と英語で話をするを通して、子供たちに自信を持たせることができると同時に、個々の子供の状態を評価することができると思う。

- ② 4年生以上には、毎学年末に意識調査を行う。（英語が好きか、ALT の話す英語の理解、文字の学習での問題点、文化についての学びなどが分かるような内容とする。）
- ③ 4年生以上には、宿題を与え、子供たちの学習についての評価の一部とするとともに、指導者に対する評価の一環とする。文字学習の評価の一部としても活用している。
- ④ 5、6年生には、毎学期末に、listening と文字学習の成果についての学力テストを実施する。
- ⑤ 教員の指導力、英語力の評価は、小諸市教育委員会指導主事が全教員の授業を参観し、その都度文書により校長を通して本人にコメントを渡す。全ての授業が T・T により行われているので、ALT に対しても必ず校長を通して comment を渡す。
- ⑥ ALT に対する評価は、ALTs meeting で授業のビデオを見ながら相互評価を行っている。

2. 中学校

- ① 新入生に関し、中学校が作成した学力テストを行う。毎学年の3学期の期末テストの結果と比較し、skill ごとの成果について教科会で評価会議を開催。翌年の指導の参考にする。
- ② 毎学年について、毎学期の期末試験では listening 及び speaking test を実施する。
- ③ reading、writing の評価の一部として「読書カード」や「自己紹介ノート」を活用する。
- ④ 学年末には、CAN-DO リストの形の学習到達目標に基づいて、年間の指導の在り方について最終評価を実施する。
- ⑤ 英語検定の3級、準2級の一次合格率も指導の在り方についての評価対象とする。

3. 高等学校

- ① 新入生対象にして、4月に小諸高校が独自に作成した学力テストを実施する。
3学期の期末試験の結果と比較し、指導の在り方についての評価法として活用する。
- ② 全学年について、夏季休暇中に多読用の教材を渡し、2学期初めに実施する実力テストで、その成果を評価する。
- ③ fluency だけでなく accuracy も大切にす視点から、一年次の途中から毎学年とも、毎週単語テストを実施、accuracy の成果を評価する。
- ④ 1年生に対しては、音声面の学力評価として、3学期に speaking test を実施。2月に授業時間中に実施し、定期試験の内、20%分を speaking test の配点とする。他学年においては、定期試験の際に実施するのではなく、日常の授業の中で継続的・組織的に実施する方法を研究する。

第2年次【学習到達目標の作成及びグループによる協同学習を中核に据えた指導法の研究】

小学校、中学校、高等学校とも、第一年次と同様

第3年次【小中高一貫した学習到達目標に基づく評価の開発及び家庭学習に関する研究】

小学校、中学校、高等学校とも、第一年次と同様

○平成27年度の進捗状況・課題

≪ 小学校 ≫

(1) 児童自身による評価について

- ① 授業の最後5分程度を用いて「本時の振り返り」を実施。

- ②listening の大切さを重視している立場から、ALT 等の話す英語が理解できたか、話す活動に積極的に参加できたか等を、評価項目ごとに A、B、C などの基準に従って、児童自身が自己評価を行う。評価の基準は、学習意欲を高めることを狙い、評価についてはできるだけ肯定的な表現を用いている。
- ③ことばや文化についての「気付き」を重視し、この欄は、自らの言葉で記入することとしている。
- ④記入の前に、HRT が、本時の学習目標の再確認、児童の学びの様子、気付いてほしかった点などを簡潔に述べることもある。
- ⑤最後に、数名の児童にコメントを口頭で発表させ、クラス全員が共有できるように工夫している。
- ⑥最後に、ALT が大切なことを簡潔に英語でコメントする。この部分は listening の応用として重視し、全員が注目して聞き、英語が理解できるという自信を持って授業を終わらせることを大切に指導している。
- ⑦「振り返りカード」は各自フォルダに収め HRT に提出する仕組みになっている。HRT は、児童たちの学びの評価ができるだけでなく、HRT や ALT の指導の在り方について、見直すことができ、授業の改善につながるものと考えている。

「振り返りカード」の一例を示すと下記の通りである。（表中の数字はクラス全体に占める割合（%）を示している）

☆☆☆英語 ふりかえりカード☆☆☆

Unit () (A) 小学校 27 (12) 月 (21) 日 (5)年(2)組 Name

(数字の内、() 内の朱で書いた数字は%を示す)

*今日の自分はどうだったのか、授業をふり返りましょう。 A、B、Cのうち、当てはまると思うものに○をしましょう。

A：よくできた B：難しいところが少しあった C：もっとがんばりたい

項目 日付	今日の学習のねらい (その都度、教員が記入する)	進んで活動に取り組んだ 	聞くこと 	話すこと 	気づくこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国のことや英語や日本語について気づいたこと、わかったこと ・楽しかったことは何でしたか ・難しいと思ったことは何ですか。 ・お友達と一緒に活動に取り組みましたか
12月21日	クリスマス 日本とアメリカの習慣の違いを知り、サンタを作ってみよう	A (52) B (40) C (08)	A (72) B (20) C (08)	A (52) B (24) C (24)	A (72) B (16) C (12)	クリスマスについて 1. アメリカと日本のクリスマスの違いがいろいろあって、驚いた。 2. サンタを作って楽しかった。 3. オリジナルサンタ作り---カラフルなサンタになって面白かった。 4. 班の友達とサンタさんを作れて良かった。 5. 最終的に皆でサンタ作りの課題ができて良かった。 6. アメリカは、いろいろな人からプレゼントがもらえていいなと思った。 7. アメリカではお年玉が無いことが分かった。 8. アメリカと日本ではまったく文化が違うことがわかった。 9. その他、多数
月 日		A B C	A B C	A B C	A B C	

(2) HRT や ALT の授業評価をどうしているか

英語教育の改善を図るには教員自身の授業の「振り返り」が欠かせない。そこで小諸市では、

当然のことながら、①まず、各学年のカリキュラムの見直しを行った。その主たる理由は、3・4年生が27年度に授業時数が増加したことである。②5・6年生については、28年度から本格的に教科として教えることになり、週2時間（現在の2倍）の大幅増となるため、それぞれ年間70時間用のカリキュラムを作成中である。しかし27年度は、概ね現行のカリキュラムに沿って授業を進めている。

上記①、②に加え、作成したCAN-DOリストに照らしながら、できるだけ事前に、HRTとALTがじっくり検討し、Teaching Planを作成することを原則としている。周知の通り、授業者が超多忙な日々を送っている実態を考慮し、Teaching Planの内容精選や簡略化した形式などに種々工夫を重ねている。Teaching Planについては後述するとして、ここでは、教員自身の授業評価の工夫について触れてみたい。

①授業評価実践の報告

ALTと検討しつつ作成したTeaching Planに沿って授業ができたかどうか、授業後にHRTとALTがコメントを記入するコラムを設け、必ず記入するよう努めている。

また、指導主事が参観した授業の場合には、記入後に指導主事に送付し、指導主事もコメントし、HRTとALTに学校長を通して送付することとしている。この部分のみについて一例をあげると、下記の通りである。

②授業後に、指導者が気付いた点

授業実施後、授業者（HRTとALT）は、授業を厳しく振り返り、改善点や、良かった点などを記し、メールで参観した指導主事へ送る。指導主事は、ビデオに収めた映像やメモを参照しながら、HRTとALTにそれぞれ日本語と英語でコメントをメールすることとしている。Teaching Planの形式については、極めて多忙な授業者の条件を考慮に入れて、3種類を提示。授業者や学校毎に、本人に適切な形式を選んで授業案を作成することとしている。しかし、授業者の振り返りと指導主事のコメントは、授業案の形式にかかわらず、できるだけ実践するように努めている。

下記は、授業者と指導主事のコメントの一例である。

(6年生の例 —— 主たる活動は、道案内)

Comment by ALT:

○Students solidified their knowledge of “Go left/right/straight” and could issue directions clearly.

They excelled by using phrases we’d briefly covered, “Continue straight,” “Go back,” and others.

○Students were focused and attentive during the demonstration. This led to a successful activity.

○Students copied place names for the first time this year. Writing was clear and well done.

○HRT contributed greatly with review, demonstration, and keeping

students focused.

Comment by HRT:

○ワークシートを使つてのマップゲームでは、児童たちは、行き着いた場所の名前を英語で表記することが初めて求められた。しかし、自分の名前以外を英語で“書くこと”は初めてだったので、かなり戸惑うのではないかと思われたが、多少、スペルに間違いはあったものの、強い抵抗もなく取り組んでいたのには驚いた。

○(心的な状況もあり)表現力に課題のある子供たちは、ALTについて単語を発音することにも消極的になりがちである。HRTが寄り添い、一緒に活動することで抵抗を減らしていきたい。

○ゲームのデモは、子供が十分に理解するまで繰り返し行うことがよい。そうすることで、「やってみよう」という意欲も高まると思われる。

Comment by Teacher Consultant :

(学校長を通して、ALT と HRT の両者にコメントを送ったが、紙面の都合で HRT へのコメントは省略)

To: ALT: I appreciate it very much that you tried to give the HRT many opportunities to use English. However, it seemed to me that you seem to be still teaching alone. Sometimes you should ask HRT, for example, how long you should spend the time for the activity. Actually, you spent much more time for the second activity than you had originally planned.

What is the most important thing: In introducing a new activity, you should follow the next steps. ①You and HRT show the demonstration, ②One of the teachers and one student will show the demo. ③Finally, a group of students will show the demo. After these steps, everybody may understand what they are going to do for the activity. Then more students will learn English ,the better they enjoy the activity.

(注) ① space の関係で、HRT へのコメントは省略、②英語によるコメントは、自学自習につながるという意味で、多くの教員から歓迎されている。

(3) ALT s Discussion among themselves

全ての授業を ALT と HRT との T T で実施している小諸市にとって、ALT による英語教育の知識と skills の学習は軽視できない。そこで、毎月一度、小・中・高等学校の ALT (6名)と英語指導主事により研修会を開催している。

時により、彼らの授業をビデオ編集し、互いにビデオを見ながら批評し合い、文字の導入、音声指導の在り方、授業の狙いと活動の選択、HRT の class management の在り方などにつ

いて、広く話し合いを行っている。ALTs meeting では十分に自分の主張ができなかった場合は、帰宅後メールにより、discussion が続くことが多い。このような会議(研修)は、我が国の英語教育改善にとって極めて必要なことであると考えます。

(4) 評価に関する課題

様々な角度から「評価」について触れてきた。しかし、もう一つの評価がまだ課題として残っている。それは、指導者(HRT)から見た個々の児童の継続的な評価についてである。小諸市では、3つほど、その意味の評価法が提案されているが、いずれも、実施までには至っていない。理由はいくつか考えられるが、英語に自信のないHRTにとって授業を英語で進めることに大きなエネルギーを使ってしまうので、個々の生徒について観察、記録することは非常に難しい、ということである。しかし、個々の児童の評価は、教育の中で最も大切な部分であり、今後、徐々に工夫しながら進めてまいりたいと考えている。5・6年生については、「教科」として教育しており、2月には、listening や speaking 等の test を実施する予定であり、その結果を尺度として評価することは難しくはない。しかし、それだけの評価には限界があり、児童が今後人生の長期にわたって意欲的に英語学習を進めることを励ますような評価の在り方が、小諸市では課題として残されている。

(5) 児童による「意識調査」(3年～6年生対象に12月末に実施)とその結果

外国語を学ぶということは、容易なことではない。一見楽しそうに学習に参加しているように見えても、実は、授業の内容理解に苦しんでいたり、友達との学習(言語)活動に積極的になれなかったり、文字学習に予想以上の抵抗を感じている児童がいることなどが予想できる。また、学年が進むにつれて学習が深まっているとは限らない。指導者は、児童のそのような心理状態をできるだけ正しく把握している必要がある。そこで、素直な気持ちを表出できることを願って、無記名方式で、下記の内容で意識調査を行った。表中の数字は%を表している。この数字から、児童の心的状況を正確に読み取り、日ごろの教育について厳しく自己評価を行い、個人レベルだけでなく、学校、あるいは小諸市全体の今後の指導改善に資するよう、調査結果を活用したい。

なお2月には、listening や productive competence などについて、簡単な問題を提示し、英語の習得状況について調査を行う予定である。その結果と既に実施した意識調査との相関関係についても検討し、今後の調査の在り方自身に関してもできるだけ改善していきたいと考えている。

調査結果について、若干のコメントを付記したい。

- ①最大の問題点は、3・4年生の「外国語活動」から、5・6年生の「教科」との間に「学習の遅滞」が存在することである。いわゆる「plateau phenomenon」(プラトー現象)であり、その原因追求と改善策に取り組まなければならない。
- ②高学年になると、低・中学年時代の楽しさが、薄れている様子も伺える。単なるゲーム的な学習から、本格的な言語学習へ、学習の質的転換が底流にあるためかもしれない。状況を正しく把握し、言語学習としての楽しさを体験させる指導へと指導者の質を高めていかなければならない。
- ③ALTの話す英語についても、児童の理解が深まっていないようである。外国語学習について

は、listening の重要性を理解しているはずであるが、HRT はもちろんのこと、ALT も、更なる研修が必要である。ALTs meeting では「MERRIER Approach」の理解と習得の training を続けているが、今後は一層実践的な訓練が必要であろう。

- ④文字学習について---- Alphabet letters の学習がいかに困難であるかは、調査結果を見ても明確である。この点を予測して、小諸市では、3年生から文字学習を徐々に進め、小学校卒業までには、大多数の児童がしっかり身に付けるようカリキュラムに工夫を凝らしている。調査結果をみると、学年が進むにつれて、多少の効果はみられるが、期待ほどではない。また逆に、学習を困難と感じている児童が増える傾向にあることも伺える。この点の研究を深めたい。

【小学校 意識調査】27年12月中旬 無記名で実施 (%)

《問1》 英語の授業は好きですか

	3年	4年	5年	6年
非常に好きです	32	29	27	17
好きです	38	34	38	39
好きでも嫌いでもない	23	29	28	33
あまり好きではない	5	7	6	9
嫌いです	2	1	1	2

《問2》 英語の授業は楽しいですか

	3年	4年	5年	6年
非常に楽しい	42	35	37	26
楽しい	42	45	44	52
どちらとも言えない	13	15	15	16
あまり楽しくない	3	4	4	4
まったく楽しくない	0	1	0	2

《問3》 英語の活動に積極的に参加していますか

	3年	4年	5年	6年
とても積極的	24	22	23	12
積極的	36	39	38	34
どちらとも言えない	25	30	28	37
あまり積極的ではない	13	7	10	16
まったく積極的ではない	2	2	1	1

《問4》 英語と日本語の違いや、外国語の文化について、学んだり知ったりすることができましたか

	3年	4年	5年	6年
非常に多くを学んだ	33	38	46	35
ある程度学んだ	48	47	43	55

あまり多くない	17	13	10	8
ほとんど学んでいない	2	2	1	2

《問5》ALT の話す英語は分かりやすいですか

	3年	4年	5年	6年
とても分かりやすい	33	29	25	26
分かりやすい	35	42	42	46
どちらとも言えない	12	14	18	17
ちょっと難しい	16	14	12	10
非常に難しい	4	1	3	1

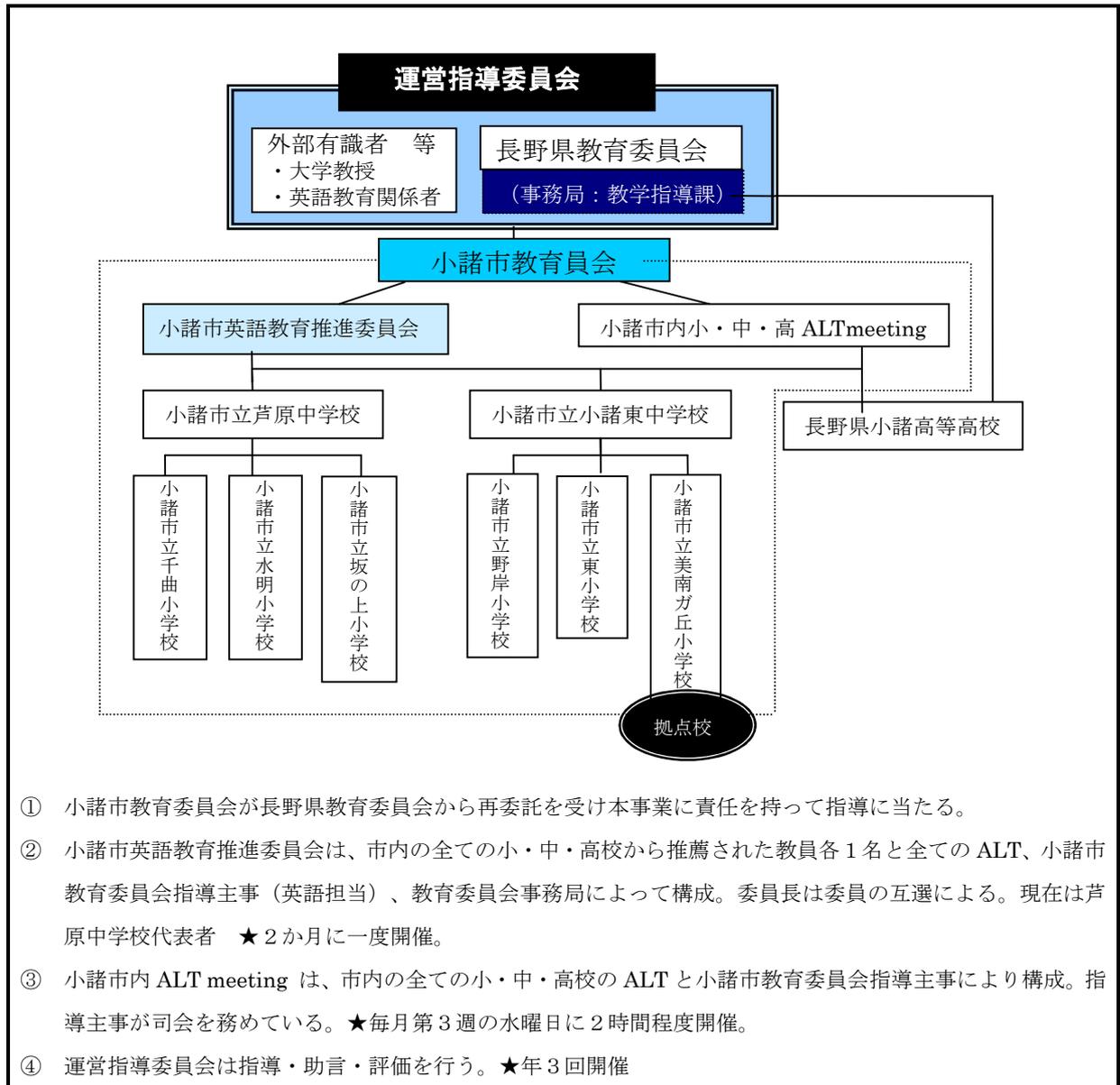
《問6》アルファベットの文字を正しく読むことができますか

	3年	4年	5年	6年
全ての大文字と小文字が読める	18	37	42	47
大文字は全て読めるが、読めない小文字がある	43	41	44	37
小文字は全て読めるが、読めない大文字がある	18	9	5	6
大文字も小文字も読めない文字がたくさんある	21	13	9	10

《問7》アルファベットの文字を正しく書くことができますか

	3年	4年	5年	6年
全ての大文字と小文字が書ける	24	32	37	40
大文字は全て書けるが、書けない小文字が少しある	33	41	51	42
小文字が全て書けるが、書けない大文字が少しある	22	10	3	8
大文字も小文字も、書けない文字がたくさんある	21	17	9	10

4. 研究組織 (1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

○活動計画

定期的開催する指導計画について：

- ① 運営指導委員会は、年3回原則として毎学期開催する。

第1回（6月上旬）：研究の目的、研究計画、指導方法、子供理解、教員(含ALT)研修、様々な視点からの評価法等についての意見交換及び協議。

第2回（9月初旬）：1学期の研究成果について発表。指導をいただくとともに、小学校の授業を参観の上、授業を通し、指導の在り方等についての指導。

第3回（H28.2月初旬）：年間を通しての成果と問題点、次年度に向けての課題について発表。小学校の授業を参観指導。

- ① 運営指導委員会小委員会：運営指導委員会のメンバーの内、大学教授及び東信教育事務

所学校教育課指導主事（地域担当主事）で構成する。年に2回開催。主として、実際の授業についての指導。

- ② 関連事項：小・中各学校は隔年に公開授業を実施。市内の全ての小学校は、年2回、全ての教員を対象に英語教育（活動）の研修会を開催。

○平成27年度の進捗状況・課題

【運営指導委員会】

第1回（6月8日）実施：研究の目的、研究計画、指導方法、子供理解、教員(含 ALT)研修、様々な視点からの評価法等についての意見交換及び協議。

場所：長野県教育委員会 小諸市からは英語担当指導主事（渡邊時夫）が出席。

小諸市における英語教育の略歴、並びに主として今年度の地域拠点事業の計画について資料に基づき、詳細に説明。委員から、質問や研究にあたっての様々な示唆をいただいた。

第2回（10月29日）実施：1学期の包括的な報告、来年度に5、6年生の授業時数が増加することに伴う新カリキュラムの作成及び ALT 等の配置、評価の在り方について渡邊時夫英語指導主事が発表し、各委員と意見交換及び協議。

場所：小諸市役所 3階 第一会議室

第3回（28年2月15日）予定：小諸市庁舎3階会議室で開催予定。

地域拠点事業の初年度の成果と課題について指導を受ける予定。

【小委員会】

第1回（7月17日）：1学期の研究成果について発表。指導をいただくとともに、小学校の授業を参観の上、授業を通し、指導の在り方等についての指導。

場所：小諸市立美南ガ丘小学校

運営指導委員会小委員会を兼ねて開催した。

3年生の授業を参観。その後、授業研究を兼ねて、第2回運営指導委員会を開催。

第2回(11月12日)： 運営指導委員会小委員会

場所：小諸市立小諸東中学校

1年生の授業を参観。英語を使った授業の有効性や ALT と H・T の T・T の進め方等をご指導いただいた。

【関連事項】小・中各学校は隔年に公開授業を実施。市内の全ての小学校は、年2回、全ての教員を対象に英語教育（活動）の研修会を開催。

公開授業の実施については、下記の「年間事業計画」を御覧ください。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会 等
4月	第1回 市内 ALT meeting	
5月	第1回 小諸市英語教育推進委員会 第2回 市内 ALT meeting ◆第1回教員英語教育研修会（学校ごとに、全小学校対象）	◆市指導主事・ALT が指導
6月	第3回 市内 ALT meeting	◎第1回運営指導委員会
7月	第2回 小諸市英語教育推進委員会 第4回 市内 ALT meeting ★第1回小学校公開授業（小諸市立美南ガ丘小学校）	★第1回 小委員会 授業参観・指導
8月	第3回 小諸市英語教育推進委員会 ◆小学校ごとに、第2回 教員英語教育研修会（全小学校：夏期休暇中） ◆親子で英語ざんまい（小諸市公民館主催）：英会話、料理、教科学習、その他（保護者も参加。英語で活動）	◆市指導主事と ALT が講師 ◆ALT とボランティアの市民
9月	第5回 市内 ALT meeting	
10月	第6回 市内 ALT meeting	★第2回 運営指導委員会
11月	第4回 小諸市英語教育推進委員会 第7回 市内 ALT meeting ★長野県信濃教育会主催授業研究会（小諸市立東小学校） 英語公開授業：長野県全域から小・中学校教員が参加 第2回小学校英語公開授業を兼ねている ★小諸市中学校英語公開授業（小諸市立小諸東中学校）	★指導者：文部科学省教科調査官・長野県教育委員会指導主事 ★第2回 小委員会 授業参観・指導
12月	第4回 小諸市英語教育推進委員会 第8回 市内 ALT meeting	
1月	第9回 市内 ALT meeting	
2月	第5回 小諸市英語教育推進委員会 第10回 市内 ALT meeting ★第3回 小学校英語公開授業（小諸市立野岸小学校）	★第3回運営指導委員会
3月	第6回 小諸市英語教育推進委員会 第11回 市内 ALT meeting ◆中学生英語合宿（新3年生：希望者）： 2泊3日の英語セミナー（全て英語を使って生活体験）	◆指導者（市指導主事及びALT）
【その他の取組】		
・小諸市内全ての小・中学校英語授業について：ほぼ毎日、小諸市教育委員会指導主事（英語教育担当）が授業を参観し、授業直後口頭で、後日、文書にて授業に関するコメントを（校長を通して）授業者に渡している。		

- ・ 1893 年(明治 29 年)小諸義塾を設立し、島崎藤村の師でもある木村熊二が留学した Holland(Michigan)の HOPE COLLEGE に毎年市内の中学生の希望者を派遣している。渡米希望者を含め市内中学生を対象に毎年 3 月に 2 泊 3 日の英語合宿を実施。

27 年度の進捗状況・課題について

この件については、主たる活動状況や課題について、上記何箇所かで触れてきた。最後に二件を報告し、来年度に向かって更に研究を拡大、進化したいと願っている。

① 小諸市内の市民（公民館）による自主的な英語活動。

このような活動は、児童たちだけでなく、市民全体に英語教育の重要性や必要性を認識してもらうことに大きな意味があると考え、27年度の事業を次の通り、報告する。なお、このような活動は継続的に実施することに意味があると考えている。

《親子で英語ざんまい》

1. 8月4日
2. 小諸市文化センター
3. 小学生 40 名参加と保護者
4. ALT がそれぞれの国のスポーツや料理を紹介。説明も作業も全て自然な英語
5. 子供たちは、自然なコミュニケーション場面で、英語を使って終日楽しく活動することができた。来年も参加したい、という声が強かった。
6. 教室の中だけの英語から、「どんな環境でも英語を使う」子供が育成できる。

② CAN-DO リストは別に添付。